

子どもの縦のつながりが紡ぐ未就園児保護者への発達展望支援 —幼稚園での子育て支援実践参加者の声からの考察—

田中文昭 戸田有一 横川和章
(やまなみ幼稚園) (大阪教育大学) (兵庫教育大学)

今日,さまざまな子育て支援プログラムが実施されているが,保護者はどのような思いをもって子育て支援プログラムに参加してくるのであろうか。そして活動中の保護者は視線の先に何を見,何を感じているのだろうか。研究対象とした子育て支援プログラムは移行支援的な側面を持ち,保護者は活動を通して我が子の発達展望を持つことにつながるものと考えられる。本研究は,支援する側が参加者の意識や行動を知ることで,子どもの発達展望を可能にするような機会として子育て支援をとらえられるようにプログラムを検証し,考察した。その結果,保護者の参加の目的や意識と活動中の視点や意識が示され,保護者自身の発達展望にもつながる支援の必要性と方向性が示唆された。

キーワード:発達展望,子育て支援,移行,在園児と未就園児の交流

田中 文昭:やまなみ幼稚園 園長,〒572-0803 大阪府寝屋川市梅が丘1-5-1, E-mail: ftanaka@yamanami-kindergarten.jp

戸田 有一:大阪教育大学 教育学部 教授,〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1, E-mail: toda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

横川 和章:兵庫教育大学大学院 基礎教育学系 教授,〒673-1421 兵庫県加東市下久米942-1, E-mail: yokogawa@hyogo-u.ac.jp

How Do Parents Adjust Their Perspectives on the Development of Their Young Children?: Evaluation of Mixed-Age Activities in a Kindergarten

Fumiaki Tanaka
(*Yamanami Kindergarten*)

Yuichi Toda
(*Osaka Kyoiku University*)

Kazuaki Yokogawa
(*Hyogo University of Teacher Education*)

There is an increasing number and variety of child-rearing support programs available to parents in Japan. However, some of the programs seem to be used just to outsource child-rearing, and therefore may not contribute much to some parents' knowledge of the development of their own children.

This study focused on a mid-sized suburban private kindergarten that asked parents of pre-kindergarten-aged young children (PKYC) to participate in its child-rearing support programs. These programs may provide parents with wider opportunities to adjust their perspectives on development by watching/joining in the activities of their own children with both age peers and with children who are already kindergarten-aged. The programs are focusing on the transition from pre-kindergarten to kindergarten age not only for PKYC, but also for their parents.

By surveying parents concerning their experiences with the activities, this study examined how the programs facilitated communication and provided perspective. The results suggested a variety of experiences for parents. For some, the programs may have provided perspective-giving opportunities. Others expressed worries concerning the development of their children, indicating the necessity of improving the programs.

Key Words: perspective on development, child-rearing support, transfer, communication

Fumiaki Tanaka : Principal of Yamanami Kindergarten, 1-5-1 Umegaoka Neyagawa-city Osaka 572-0803 Japan.

E-mail: ftanaka@yamanami-kindergarten.jp

Yuichi Toda : Professor, Teacher Education, Osaka Kyoiku University, 4-698-1, Asahigaoka Kashiwara-city Osaka 582-8582 Japan.

E-mail: toda@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

Kazuaki Yokogawa : Professor, Early Childhood Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume Kato-city Hyogo 673-1421 Japan. E-mail: yokogawa@hyogo-u.ac.jp

問題と目的

中央教育審議会の2005年答申「子どもを取り巻く環境の変化をふまえた今後の幼児教育のあり方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」では、子育て支援は「単なる子どもへの支援だけではなく、親が親として育つことを支援する取り組み」であると述べられている。つまり、子育て支援は、育児の外注化の推進ではなく、親と子どもが共に育つことを支援するものである。

一世代前は多世代の大家族で暮らす姿がまだ多かったが、今日では核家族化が進み、日常的に祖父母と接する機会が減少している。祖父母との同居が当たり前であった時代は、子育ての方法や経験が祖父母から父母に伝授され、精神的な支えとしても祖父母の存在の意味は大きかった。特に、子育てを経験している祖母が身近にいたことが、母親にとっては不安が軽減される要素であるとされている(本保・八重樫・奥山・林, 2003)。また、住居が住民相互の交流が難しいマンション等へと変化し、隣人との接点を持ちにくい家庭が数多く存在するようになった。そのような集合住宅では共同体としての近隣との関係は持ちにくくなっている。加えて、父親が長時間労働に従事している場合には、もっとも頼れる相談相手であるべき父親の不在化が進み、母親にとっては孤独な子育てを強いられるような環境になっている。

その中で、情報化が進み子育てに関する知識や情報はさまざまな育児雑誌やインターネットなどから手軽に入手できるようになってきているものの、それらの情報は多くの場合、一方的であり「自分に必要な情報を上手く取捨選択できずに一般的な子どもの発達や育児の原則に縛られ、我が子の成長が標準より遅れていることや育児書どおりの方法がうまくいかずに不安やストレスをもってしまふ母親」(小山, 2006)にとっては、我が子の成長・発達を多様なあり方があるものとして実感できる機会は多くない。

原田(2003)による大規模な子育て実態調査(いわゆる「兵庫レポート」)では、幼稚園就園前までの母親たちの子育てに対する負担感がいかに大きいかについて述べられている。「子育てをたいへんと感じますか」という問いに、実に60%前後の母親が「はい」と答えており、「子どもの自我が芽生えてくるにつれ、母親たちの戸惑いが増え、母親たちの感じる負担感が増大している」様子がうかがえる。さらに、20年前の1983年に実施された「大阪レポート」と呼ばれる同様の子育て実態調査(服部・原田, 1991)との比較では、「育児のことで今まで心配なことがありましたか」という問いに対して「しょっちゅう」心配であるという割合が「大阪レポート」では6~10%程度であったものが「兵庫レポート」では15~18%程度になっている。「しょっちゅう」「ときどき」心

配であると答えた割合を見ても、59%~65%程度であったものが、子どもの年齢を問わず75%前後になっている。子育て仲間についても「近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする人はいますか」という問いに「1~2名」もいないという母親が16%から35%になっている。この調査研究からも母親の孤立化が進んでいることが容易に推測される。

このような子育て環境の変化による母親の孤立化と子育てへの意識変化の中で、1998年に改訂された幼稚園教育要領では幼稚園が「地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること」と明記された。また、先述した2005年の中央教育審議会答申では幼稚園等の施設には家庭や地域社会の教育力を補完、再生、向上させていく役割などが求められるようになり、子育て支援の推進が明記された。さらには2007年に改訂された学校教育法においても、「家庭及び地域における幼児期の教育の支援に努める」ことを幼稚園に求めている。

現在、幼稚園や保育所などの施設で行われている子育て支援事業は多岐にわたる。八木(2002)は子育て支援に関する最近の動向を報告し、北野(2006)は子育て支援のあるべき姿を論じている。須永(2008)の子育て支援実施施設へのアンケート調査によると、代表的なものとして実施率の高いものから順に、①子育て(育児)相談、②園庭開放、③保育所の行事への参加、④電話による子育て(育児)相談、⑤育児講座、⑥子育てサークルへの支援、⑦絵本の貸出、⑧子育てサロン、⑨子育て情報誌の発行、⑩出張保育となっている。

このように様々な子育て支援事業の中で、筆頭著者が勤務する大阪府下の私立Y幼稚園では、10年以上前から未就園児親子と在園児が交流する子育て支援プログラムが実践されている。それは未就園児親子のみを対象とするものではなく、幼稚園の教育課程に子育て支援のプログラムを位置付けることにより、年に数回の未就園児親子と在園児の交流が可能となっている。

この取り組みはKagan & Neuman(1998)の分類による移行の取り組みの三種類(①学年の変わり目に子ども達・家族・学校等が行う見学・相談・引き継ぎなど、②家庭や地域、学校、園などの間の日常的な連携、③学校や園などの接続に関する教育的・カリキュラム的な検討や接続時に困難を感じる子どもへの援助プログラムの開発)の2番目と3番目に関係しているが、園のカリキュラムの中に未就園児との交流を位置付けていることが特徴である。子どもの縦のつながりを育むために幼稚園がかかわる実践としては、未就園児と在園児との交流の他にも、縦割保育などの異年齢交流や幼小接続実践などもある。縦割保育については夏堀(2007)や塩路・佐々木(2005)など、幼小接続については玉置・戸田・瀧川(2006)や滋賀大学教育学部附属幼稚園(2004)などの

研究で知見が積み上げられているが、未就園児と在園児の交流に焦点をあてた研究は見かけられない。

本研究が対象とするのは、その未就園児と在園児の交流実践であるが、その実践により子どもも保護者も年齢差を意識することになり、南館（2001）が指摘するように在園児には「思いやり」「優しさ」といった向社会的な行動と「積極性」などが見られ、在園児の心の育ちの場になっていると思われる。また、未就園児が在園児や保育者との出会いから園を楽しいところと感じたりすることで、家庭から園への移行の支援になる側面があるだろう。未就園児保護者にとっても、幼稚園在園児と親子で活動を共にすることにより、在園児の姿から我が子の発達の見通しを持ったり、同世代の保護者から子育てや子どもの個人差について知ったりすることになると思われる。これらのことから、保護者が子どもの発達展望を持つことにつながると考えられる。

最近では未就園児親子と在園児の交流を目的とした子育て支援事業が徐々に見られるようになり、保護者・園児・保育者それぞれへの効果について報告されている（名須川・岸本・小林，2008）。それらの研究をふまえ、本研究ではさらに、そのような交流プログラムにおいて、子どもの変化を保護者がどのように見ているのか、保護者は自身の意識変化をどのように報告するのかを探っていく、実践が保護者による子どもの発達展望に果たす役割について検討してみたい。ここでの発達展望とは、子どもの発達についての、今後の展望である。ここに焦点をあてるのは、子育て支援が、親の育児の外注化ではなく、親としての知識や態度を積み重ねる契機となるかどうかを検討するためである。

上記の問題意識から、本研究においては、まず、対象プログラムの異年齢設定での活動について保護者はどう考えたのかを質問紙調査やインタビューの内容から検討する（課題1）。そのうえで、子どもの変化の認知や保護者自身の意識変化が保護者自身によってどのように語られるのかについて探り、保護者による子どもの発達の展望について検討する（課題2）。さらに、そのような発達展望を可能にする機会への継続的参加を願う立場から、継続的に参加することを参加者はどのようにとらえ、どのようなことが参加者の満足感をもたらし、継続を促すことにつながるのかについて調べ、検討してみたい（課題3）。

方 法

実践の概要

本研究の対象とした子育て支援プログラムは大阪府N市の私立Y幼稚園で行われている「輪になってあそぼう」と「サタデースクール」という2つの活動である。「輪になってあそぼう」は、10年以上前から年に5回実施さ

れている、未就園児親子と在園児との交流会である。平日の午前中に未就園児親子と在園の年長児が一緒になって活動する。絵の具遊びやどろんこ遊びなど、普段は家庭で体験することのできない遊びを中心に、毎回内容を変えて実施されている。参加資格は0歳から3歳までの幼稚園就園前の乳幼児とその保護者である。

「サタデースクール」は、月に1度の割合で年に7回、土曜日の午前中に実施され、0歳から小学校2年生までの乳幼児・児童とその保護者（在園児かどうかは問わない）が参加できる子育て支援プログラムである。30分の園庭開放の後、60分ほどで大人も子どもも参加できる身体活動を実施している。

調査時期

2008年6月10日から11月15日の（計9回）で表1に示す通りである。

表1. 活動日と参加者数

時 期	参加在園児数	未就園児参加数
W-6月10日(火)	84	83
W-9月25日(木)	83	39
W-11月6日(木)	83	43
S-6月21日(土)	19	29
S-7月5日(土)	17	24
S-8月23日(土)	5	15
S-9月20日(土)	16	22
S-10月18日(土)	21	26
S-11月15日(土)	21	26

Wは「輪になってあそぼう」Sは「サタデースクール」を表す。

6月より調査を実施したため5月の活動は本研究の対象外となった。また、「輪になってあそぼう」の8月は未就園児のみの活動であったため、この研究からは除外した。

調査協力者

調査協力者は、子育て支援プログラムに参加した未就園児を持つ保護者であった。兄姉が在園児や卒園児などでも、弟妹が未就園児の保護者は未就園児保護者として扱った。祖父母の回答4名、フェイスシート未記入1名、調査項目の半分以上に回答していない者1名を分析の対象から除き、最終的に「輪になってあそぼう」で95名（男性0名、女性95名）「サタデースクール」で65名（男性14名、女性51名）が分析対象となった。これらのうち複数回参加した回答者（2回目の調査への回答者）は「輪になってあそぼう」で27名（女性27名）、「サタデースクール」で24名（男性3名、女性21名）であった。

質問紙調査の内容と手続き

フェイスシートでは回答者の①年代、②性別、③三世同居の有無、④住居形態、⑤回答者と配偶者の職業、⑥回答者のすべての子どもの性別と年齢、⑦プログラム参加児の出生順位を尋ねた。

質問内容は、①親子の現状（「子育てに不安や悩み、

戸惑いなどがありますか」「子育てを楽しんでいますか」など) ②活動での保護者の参加状態(「記入されている方は、このプログラムを楽しむことができましたか」「保育者と話す機会がありましたか」など) ③活動での子どもの参加状態(「お子さんは同年代か年下の子どもと一緒に活動できましたか」「プログラム中にお子さんのいつもと違う姿を見ることができましたか」など) ④活動に関する保護者の意識(「プログラム中にご自身の子どもと他の子どもとを比べましたか」「比べることによってご自身の気持ちに変化がありましたか」など) ⑤継続参加に対する意識と変化(「複数回参加された方はプログラム中に以前の参加状態と比べてお子さんに違いがありましたか」「このようなプログラムに継続的に参加することは子育て不安の軽減や解消に役立つと思いますか」など) ⑥変化の般化(「このようなプログラムに参加することでご家庭でのお子さんの様子に変化がありましたか」)であった。

質問紙は2回に分けて行った。前年度までの傾向で継続参加が多く見られたことから初回と2回目以降の質問内容を分け、さらに異年齢交流の特徴を踏まえた質問内容を2回目以降に設定し、回答負担の軽減を図った。1回目の質問紙の内容は①②③④、2回目の内容は⑤⑥であった。

実施は個別記入形式であった。受付の際に質問紙を手渡し、終了後に回収ボックスへの投函を依頼した。参加者には受付とともに謝礼として文房具を渡した。調査協力については質問紙上に依頼文を掲載し、活動開始前にも口頭で調査依頼を行った。回答はいずれも無記名で行われた。継続調査であるため識別データとして①参加した子どもの生年月、②回答者の性別と生月、③回答者の好きな色を用い、複数回参加した場合でも匿名のまま継続して質問に答えてもらうことができるように工夫した。回答に要する時間は概ね10分程度であった。

インタビュー調査の内容と手続き

個別形式で行い、多くのインタビューについては調査協力者1名に対して2名の調査者で聞き取りを行った。2名ともが質問内容をそれぞれ別に聞き取り、インタビュー終了後に互いの内容をすり合わせた。子育て支援プログラム終了後にインタビュー協力者を募り、開始前に口頭説明を行った。調査協力者へは終了後に謝礼として台所用用品等を渡した。回答については氏名等の個人情報は一切聞かず、記入の終了した質問紙をインタビュー開始前に調査者に渡してもらうことで回答者の属性等を引き継いだ。質問は6問あり、親子それぞれの仲間関係を中心に子育て支援プログラムへの参加理由など質問紙の内容をさらに深く尋ねた。一組15分程度を目安に行った。インタビュー調査協力者数は「輪になってあそぼう」23名(女性23名)「サタデースクール」28名(男性11名、女性

17名)であった。

結果と考察

「輪になってあそぼう」は平日の実践、「サタデースクール」は休日の実践と位置付けて分析した。平日実践の調査協力者はすべて母親であったため「平日母親群」とし、休日実践の調査協力者には父親も含まれていたため「休日母親群」と「休日父親群」に分けた。なお、自由記述回答にある括弧内の数字は記述の件数を表す。

1. 保護者の基本的属性と意識

まず、基本的な情報として、どのような人たちが本研究対象の子育て支援プログラムに参加したのかについておさえるため、調査協力者の属性及びその意識についての集計結果を示す。

調査協力者は30歳代が約8割を占めた。二つの母親群間では「休日母親群」の方が年齢層がやや高かった。各群とも10%前後が祖父母と同居であった。住居形態は20~40%が「戸建て」で、残りが「集合住宅」であった。職業は母親群はほとんどが専業主婦で、父親群は全員が会社員であった。子どもの数は三人までで、一人もしくは二人の家庭で80~90%となった。参加した子どもの約半数が第1子で、1子と2子の合計で各群とも80%前後であった。

次に調査協力者の子育てに対する意識を見てみたい。各群とも95%前後の割合で「子育てを楽しんでいる」と回答している一方で、「子育てに不安や悩み、戸惑いがあるか」の問いに対して、「平日母親群」で44.1%、「休日母親群」では46.3%、「休日父親群」では37.5%が「ある」と回答した。藤木(2004)が福岡市で実施した子育て中の保護者の意識調査でも保護者の87.5%が「子育てを楽しんでいる」と回答しているが、「子育ての悩みの有無」については45.2%が「ある」と回答している。本研究についても同様な結果が得られたことから、子育てに対する意識は全国的なものと同様変わりはないものと考えられる。

「子育ての不安や戸惑いに対してどのようなものがあるのか」に対する自由記述から、子育て不安等の内容をみると、母親群では「子どもへの叱り方やしつけ」(10)、「イライラして怒ってしまう」(7)といった「子どもへの対応」と「子どもが言うことを聞かない」(5)等の「子どもの様子」の2点に集中した。父親群では三つの回答しかなかった。それらは「子どもへの対応」では「子育て全般、特にしつけ」、「子どもの様子」では「お調子者なので心配」「どのように育つのか不安」という回答であった。

次に子育て支援プログラムへの参加目的を明確にするために「子育て支援に望むことは何か」という問いへの

自由記述を見たところ、「平日母親群」「休日母親群」とともに「家庭ではできないあそび」(18)が最も多かったが、「親同士の交流」(11)というように仲間作りを目的として参加している保護者も多いことがわかった。

調査協力者の「仲間作りの意識と方法とはどのようなものであるか」については、「子育てをする上で仲間作りは必要か」の問いに各群とも95%以上が「仲間が必要」と回答している。しかし「平日母親群」で3.2% (94人中3名)、「休日母親群」では2.0% (50人中1名)が「仲間は必要ない」と回答していた。

「仲間作りの方法」について、インタビューの回答からは、「平日母親群」と「休日母親群」では「子育て支援センター等の利用」(21)、「公園等で遊ぶ」(12)、「近所の人達とのコミュニケーション」(12)が共通しており、仲間を求めて積極的に外に出て行っている様子が見えがえた。しかし「休日父親群」では「職場の人との交流」(6)、「特になし」(4)といった回答が目立ち、積極的な仲間作りが行われていないことがわかった。また、保護者の活動中の行動については、「平日母親群」では63.4%が、「休日母親群」では50.9%が他の保護者と話をしたのに対し、「休日父親群」は25.0%と極端に低い割合となった。子育てをする上で仲間づくりは必要だと思っているが、積極的に行動できていない父親の姿が浮き彫りとなったと言える。

2. 在園児との交流による影響

対象プログラムの異年齢設定での活動について保護者はどう考えたのかを検討する(課題1)。

「異年齢の子どもと遊ぶ機会は子どもの成長に必要なか」の問いに、3群ともほぼ100%が「必要」と回答した。必要と思う理由の自由記述では「上の子からいろいろなことを学び真似できる」(16)、「優しい気持ちが育つ」(11)、「協調性、社交性が育つ」(10)という回答が3群ともに多く見られた。異年齢児と交流することで「思いやりや優しさが育ち、下の子は上の子から色々な事を学び真似でき、大切である」と受け止められているようだ。「いつもと違う子どもの変化」について尋ねた自由記述の中にも「いつもは好き勝手に遊ぶのにお兄ちゃんの言うことを聞いていた」「親から離れて大きい組の子どもと楽しく遊んでくれた」のように在園児の影響によるものと思われる未就園児の姿についての記述が15件もあり、在園児との交流が未就園児の積極的な姿を引き出していることが一部うかがえた。

3. 子どもに向けられる保護者の視点と意識

子どもの変化の認知や保護者自身の意識変化が保護者自身によってどのように語られるのかを探り、保護者による子どもの発達の展望について検討する(課題2)。

保護者は活動中の子どものどんなところをどのように見ているのであろうか。「子ども自身の変化」に焦点を合わせた視点として「活動中にいつもと違う姿を見ることができたか」という質問に対して、「平日母親群」で73.6%、「休日母親群」で79.2%、「休日父親群」で64.3%が「いつもと違う姿を見られた」と回答した。具体的な変化の内容を自由記述からみると、上述したような在園児との交流による変化以外では、「集中して遊んでいた」(9)、「積極的に遊んでいた」(6)など普段とは違う積極的な変化が大多数となったが、「人が多いと溶け込めない」(1)、「なかなか前に出ない」(1)など、消極的な態度に課題を見出ししている回答も少数ながらあった。

「活動中に他の(同年代の)子どもと比べたか」という「他児との比較」に関する質問では「平日母親群」で60.0%、「休日母親群」で45.1%、「休日父親群」で42.9%が「全く比べなかった」と回答した。休日群と平日群による違いは、休日群では身体活動が主であったために他児と比較し易い環境であったことが反映されたのではないかと考えられる。

では、他の子どもと比較することで保護者の心にはどのような変化が生じるのであろうか。「他の子どもと比べることで自分自身の心に変化が生じたか」という質問に対して、他児との比較をしたと回答した調査協力者のうち「平日母親群」では13.9%、「休日母親群」では28.6%、「休日父親群」では50.0%が「気持ちの変化があった」と回答し、父親群ではその割合が高い傾向にあった。さらに、「どのような気持ちの変化が起こったか」を自由記述からみると、「私(母親)の手を離れてお兄ちゃんと行動できていたので安心した」(1)、「皆、それぞれなので成長の仕方など気にしなくていい」(1)、というような比較の結果を肯定的にとらえている一方で「もっと積極的になってほしかった」(1)、「我が子には協調性がないのではないか」(1)と課題的な視点で子どもを見ている回答が見られた(8人中4人)。

総じて保護者は活動における子どもの良い部分の発見を報告しているが、他児との比較によって子どもの課題が意識されてもいる。子どもの発達展望については、保護者が在園児の姿から自分の子の将来の姿を見通すというようなものはほとんど無かったが、子どもの新たな姿への気づきは将来への展望を準備する可能性があると思われる。一方で、発達の個人差についての理解に関する記述があり、発達展望における幅を与えているとも言えるかもしれない。

4. 継続参加による効果とプログラム満足度の要因

最後に、継続的に参加することを調査協力者はどのようにとらえ、どのようなことが調査協力者の満足感とな

り、継続を促すことにつながっているのかを検討する(課題3)。まず、子育て支援プログラムに継続して参加することが、参加者にどのような影響をもたらしているのかについて、複数回参加者の質問紙(第2回質問紙)の結果から考えてみたい。ここでは「休日父親群」は対象者が少数であったために分析から除き、「平日母親群」と「休日母親群」のみを対象とした(分析対象数:平日母親群27名、休日母親群21名)。なお、まとめるにあたっては「子どものために参加」したのか、「自分自身のために参加」したのかに焦点を置いて分析を試みた。

「どのようなことにメリットを感じて複数回参加するのか」に対する回答からは、両群とも「子どものために」にメリットを感じて複数回参加していた。複数回参加することで「子どもが集団に慣れるのではないか」(6)、「いろいろな子どもと一緒に遊ぶことで、できることが増えるのではないか」(5)、「子どもの社会性が育つ」(4)、「幼稚園に慣れることができる」(3)などと「子どもへの効果」を期待して参加している記述が多く、むしろここで、子どもの発達展望に関する回答が見られた。また、「子どもが楽しみにしている」(5)、「遊び場として」(4)という理由も多くあった。一方で、「自分自身のために参加」しているという記述は両群とも非常に少なく「複数回参加することで顔見知りができ、保護者や保育者とコミュニケーションがとれ、幼稚園がどういところかを知ることができる」という意見に集約できた。

では、複数回参加することは保護者のためにはなっていないのだろうか。「複数回参加することが保護者の子育てで不安の軽減・解消に役立っているか」に対する回答では「平日母親群」で81.5%、「休日母親群」では81.0%が「役に立っている」と答えていた。「どのような点で役に立っているのか」について自由記述をもとに検討したが、両者ともに共通した回答が「親同士の交流ができる」(9)、「他の子どもを見る機会になる」(6)、「子どもの成長が見られる」(4)であった。複数回参加する目的は「子どものため」であるが、継続して参加することが子どもの成長や他の子どもを見ることになり、自分自身に気づきが生じたり、他の母親と友達になったりとコミュニケーションが取れ、「自分自身のため」にもなっていると参加者は感じていることが示唆された。

それでは保護者が期待した「子どもへの影響」とはどのようなものがあったのだろうか。「複数回参加することによって活動中に子どもは変化したか」という質問に対して、「平日母親群」では77.8%、「休日母親群」では75.0%が「変化があった」と回答した。変化の内容は両群とも、「活動に参加できるようになった」(15)、「子どもの積極性が増した」(5)という内容が非常に多く見られたが、「平日母親群」にのみ「以前より参加しなくなった」というような消極的な態度になった回答が3

件見られた。しかし、自由記述からはこの3名の保護者は、複数回参加する機会を「子どもが場に慣れる機会」であるととらえ、消極的な態度に対しても否定的な見方をしていなかった。群を問わず、自分の子どもに視点を向けて変化をとらえている場合は子どもの積極的な変化に目がいく傾向があり、子どもの良い点を探ろうという保護者の姿勢が見られたものと推測される。

複数回参加することで、多くの子どもに積極的な変化が見られることがわかったが、これはその場限りのものではなく、家庭などに般化して見られるのであろうか。家庭においても、このプログラムでの効果が見られるかを尋ねた。「この子育て支援プログラムに参加して、家庭での子どもの様子に変化があったか」の質問に対して、「平日母親群」では66.7%、「休日母親群」では70.0%が「変化があった」と回答した。自由記述で変化の内容を尋ねたが、両群とも、「積極的になった」(6)と子どもの行動に変化が現れただけではなく、「幼稚園に行きたがるようになった」(5)、「次回を楽しみにするようになった」(3)と、園への移行支援に関する回答が多かった。また、「体験した内容を家庭で再現する、話す」(6)という回答も共通して多く見られた。

上記のような効果は、プログラムに満足し、継続的な参加がなされる中で確かなものになっていくと思われる。そこで、「どのようなことが調査協力者の満足感につながっているのか」を明確にするために、「子育て支援プログラムを楽しめたか」というプログラムへの満足度を表す項目と、「保護者と話す機会」「保育者と話す機会」「プログラム中に同年代、年下と活動できたか」「プログラム中に年上と活動できたか」「活動中に見られた子どものいつもと違う姿」「他の子どもとの比較」との相関を調べた(表2)。

表2. プログラム満足感との相関

	平日母親群	休日母親群	休日父親群
保護者と話す機会	-.168	.245	.372
保育者と話す機会	.270*	.279	.378
同年代・年下と活動できたか	.221*	.380**	-.099
年上と活動できたか	.465*	.350*	-.100
いつもと違う子どもの姿	.510**	.405**	.255
他の子どもとの比較	.117	.086	-.060
	88	48	14

上段は Pearson の相関係数 *5%水準で有意(両側)
下段は人数 **1%水準で有意(両側)

「平日母親群」では「保育者と話す機会」「同年代・年下と活動できたか」「年上と活動できたか」「活動中に見られた子どものいつもと違う姿」との相関が有意であっ

た。「休日母親群」では、「同年代・年下と活動できたか」「年上と活動できたか」「活動中に見られた子どものいつもと違う姿」の相関が有意であった。「休日父親群」ではプログラムの満足度と相関が有意な項目は無かったが、「保護者と話す機会」と「保育者と話す機会」の相関係数が比較的高かった。一方、母親群では子どもの活動状態や子どもの変化がプログラムの満足度に関係していると考えられる。また、「他の子どもとの比較」については、どの群とも有意な相関は見られなかった。

まとめと課題

保護者の多くは子育て支援プログラムを、子どものためには普段できないような遊びができる場所として、自分のためには仲間作りの場としてとらえていた。母親群は、仲間作りのために積極的に外に出ている姿が見られる一方で、父親は子育てをする上で仲間は必要だと思っているが、積極的な活動ができていないことがわかり、母親群と父親群では意識は似通っていても行動に違いが見られた。

課題1の在園児との交流については、調査協力者の多くが異年齢交流の必要性を感じていることがわかった。課題2の子どもを見る視点では、子ども自身の変化に焦点化した場合、保護者の目は主に子どもの良い部分に当てられていたが、他児との比較では子どもの課題的な部分に目を向けやすいことが示唆された。課題3については、継続的に参加することは「子どものため」と思っているが、継続することで「自分自身のため」にもなっていることを保護者は認識していることがわかった。また、子育て支援プログラムで体験したことが、家庭での姿に反映していると思われることが示された。活動中における視点と意識では、母親と父親の違いが見られた。「どのようなことが子育て支援プログラムの満足度につながっているか」では、母親の満足度は子どもの活動状況と関係があったが、父親の場合はそうではなかった。父親については「他人と話す機会」が満足度とにいくらかの関係があるのではないかと推測されるにとどまった。父親の参加を促すには「父親だけの参加プログラム」など父親が参加しやすいもので、参加者同士でコミュニケーションが取れるようなものが父親の満足度向上につながるのではないかと推測される。

本研究を通して参加者側が何を必要として子育て支援プログラムに参加し、どのような視点で活動を眺め参加し、何を感じていたかが示された。しかし、保護者が子どもの発達展望をどのように持つことになったのかについては、今後更に研究をしていく必要がある。また、保護者自身が未就園児の親から園児の親になろうとする際に、発達展望をどのように持つていくのだろうか、そして、そのためにどのような準備をしているのだろうか。

そのようなことを視野に入れた子育て支援プログラムの立案や調査も必要であると思われる。また、この子育て支援プログラムの特徴であった在園児との交流がもたらす効果については自由記述よりその一部を推察できただけであり、効果については検証することができなかった。本研究で明らかになった各群の特徴をとらえ、実施曜日や対象を限定し、在園児との交流がもたらす効果を中心に考えていくことで、支援される人同士がつながり、在園児と未就園児がつながっていくような十分な縦のつながりが保証できる子育て支援プログラムへとつなげられるのではないかと考える。

引用文献

- 千葉千恵美・渡辺俊之・平山宗宏・田島貞子 (2009). 「親子ふれあい教室」が母親の気分状態に与える影響 高崎保健福祉大学紀要, 8, 37-48.
- 藤木悦子 (2004). 子育て中の親の意識と親子活動に関する一考察 福岡女子短期大学紀要, 63, 49-62.
- 原田正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育ての現場と子ども虐待予防— 名古屋大学出版会
- 服部祥子・原田正文 (1989). 乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点 名古屋大学出版会
- 本保恭子・八重樫牧子・奥山清子・林基子 (2003). 乳幼児を持つ母親の子育て不安 日本保育学会大会研究論文集, 56, 812-813.
- Kagan, S.L. & Neuman, M.J. (1998). Lessons from three decades of transition research. *The Elementary School Journal*, 98, 365-380.
- 金谷京子・坪井敏純・吉田ゆり (2005). 子育て支援の限界と今後の課題—保育所を中心とした子育て支援活動調査から— 保育学研究, 43, 63-75.
- 北野幸子 (2006). 内容を考える：サービス内容をデザインする 北野幸子・立石宏昭(編著) 子育て支援のすすめ pp.181-191 ミネルヴァ書房
- 小山優子 (2006). 子育て支援の必要性 北野幸子・立石宏昭(編著) 子育て支援のすすめ pp.11-19 ミネルヴァ書房
- 南館忠智 (2001). 幼稚園における子育て支援—在園児に意味ある支援の創出— 初等教育資料, pp.78-84.
- 文部科学省 (2005). 中央教育審議会答申
- 名須川知子・岸本美保子・小林みどり (2008). 幼稚園における地域子育て支援活動の研究—兵庫教育大学附属幼稚園における園庭開放の意味— 兵庫教育大学学校教育学研究, 20, 67-72.
- 夏堀睦 (2007). 正統的周辺参加論の視点による異年齢保育の効用 富士常葉大学研究紀要, 7, 171-184.
- 滋賀大学教育学部附属幼稚園 (2004). 学びをつなぐ—幼小連携からみえてきた幼稚園の学び— 明治図書

- 塩路昌子・佐々木宏子 (2005). 異年齢交流の視点から見た乳幼児保育：0歳から6歳までの子どもの育ちを見通すために 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), 20, 103-111.
- 須永進 (2008). 子育て支援とは何か 子育て支援の現状 須永進 (編著) 子育て支援を考えるために pp.8-18 蒼丘書林
- 玉置哲淳・戸田有一・瀧川光治 (2006). 幼稚園カリキュラムの分類尺度による類型化の試みー幼小接続段差の園長による評価との関連を探るー 乳幼児教育学研究, 15, 119-128.
- 八木成和 (2002). 子育て支援に関する最近の研究動向をめぐって 四天王寺国際仏教大学紀要 (34・42), 291-302.

謝 辞

本研究の実施にあたり調査にご協力いただいた大阪教育大学幼稚園教員養成課程の学生のみなさんとY幼稚園の先生方に厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は平成20年度 科学研究費補助金 奨励研究 (課題番号20906016) の一環として行われました。

(2010. 9. 1受稿, 2010. 12. 16受理)